

郷土そば探訪の旅、パート3

高遠城主・保科正之公を偲ぶ

相原喜代治

(江戸ソバリエ十期)

最近私は郷土そばを探究し江戸ソバリエ協会のホームページに投稿させて頂いていますがそのルーツは十年前の江戸ソバリエ認定時の卒論、脳学レポートです、

★保科正之公の会津への移封がなければ[高遠そば]は無かった？

★上総飯野藩保科家が存在しなければ[更科そば]無かった？

の二題です。

認定後十年を迎え、これらの資料を引っ張りだし見てみると既読の保科正之公に関する数冊の時代小説に加えネット検索で得た情報で書かれたレポートであり現地へ行って調べていないことが分かりました、数年前から山形県(寒河江、大石田、村山、尾花沢)、福島県(会津、山都、磐梯山、檜枝岐)等のそば処へ行きそばの食べ歩きには行きましたが歴史探訪はしませんでした。

此の反省を踏まえ、そば好きで知られる保科正之公のそばとの関わりを現地に行き調査を開始することにした、

数年前に山形県寒河江、大石田地方で行われていた丸延し、去年は長野県北部の飯山市の富倉そば、新潟県十日町のへぎそば、今年は信州そば発祥の地、長野県伊那市高遠(城主保科正之公)にも取材に行かせて頂きました。

取材すればするほど保科正之公とそばとの関わりが分かってきたように思います。

★保科正之公の会津への移封が無かったら「高遠そば」は無かった？

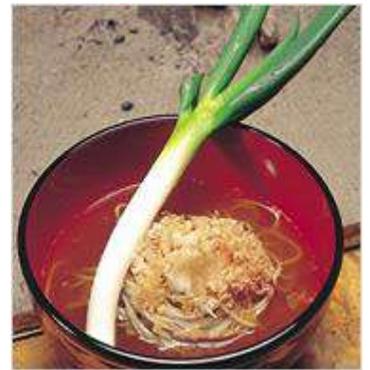
・・・かもしれない。

信州からそば職人を従えてやって来た大変そば好きなお殿様、初代会津藩主保科正之公、そのお殿様が好んで食べていたそばが有った。

南会津に位置する大内宿は江戸時代、会津から日光に繋がる街道の宿場町として栄えた地、当時の面影そのままに茅葺屋根の家が軒を連ねています。

その大内宿に長ネギ一本をそのまま添えた珍しいそばが有る、「高遠そば」と言われています、すりおろした大根に汁を加えたピリッと辛い二八そば、箸の代わりにねぎで手繰ってかじりながら頂く。

保科正之公は信州の高遠から山形藩主を経て会津へとやって来ました、大根おろしの汁で食べるそばが好物だったことから会津ではおろしそばのことを高遠のお殿様が持ってきたそば「高遠そば」と呼び、以来、会津では名物そばとなっています。



(大内宿・三澤屋の高遠そば)

◎保科正之公とはどんな人物なのか？

保科正之は、三代将軍・徳川家光の弟です。

二代将軍秀忠が側室に生ませた子で、

正室お江与の方の嫉妬が凄まじいものだから、こっそり信濃国高遠の保科家へ養子に出されてしまったのです。

三代将軍家光も将軍になるまで、その弟の存在を知りませんでした。弟は弟で自分は高貴な身であることを知らされながらも決してそれを表に出すことなく成長しています。

21歳の時、養父保科正光が逝去したため、元服して名を保科正之と改め、高遠藩三万石の藩主となりました。

その後家光に人格を認められた保科正之は26歳にして最上山形二十万石を与えられ、高遠から多くの家臣を連れて山形へ移ります。

ここから政治家としての本領発揮となるわけですが、自分を育ててくれた高遠保科家の重臣たちが手足となって正之を助けます。

最初の仕事は洪水や凶作などで苦しむ領民を救うことでした。

33歳の時に山形から会津二十三万石へ移封となり、つぎつぎと仁政を実行に移していきます。

家光逝去の際に四代将軍家綱の輔弼役(補佐役)を命ぜられ、以来20年以上会津へ帰ることなく、自分を養育してくれた重臣達に藩政を委任して幕政に全身全霊を打ち込みますが、大切な仁政は江戸より指図して藩政に反映させました。



(会津・鶴ヶ城)

○藩政の主なものをあげると、

- ・殉死の禁止　・税制改革と減税実施　・社会制度を創設(飢餓対策)
- ・90歳以上の高齢者へ扶持米の支給
- ・間引きの禁止　・救急医療制度の創設　・会津家家訓の制定などで、
領民を慈しみ、親や子供を大切に暮らせる世の育成を目指していました。

幕政については四代将軍家綱を補佐し、徳川家康以来武力によって制圧していた体制を文治政治に切り替え平和が長く続くようきめ細かな政策を講じました。

○幕政の主なものをあげると、

- ・末期養子制度緩和　・玉川上水の開削　・振袖火事の際、江戸市民の救済を優先するため江戸城の天守閣を再建せず
- ・新しい江戸の町づくり　・大名証人(人質)制度の廃止を建議。

晩年になって、家綱から「松平姓を名乗り、葵(あおい)の紋を家紋として用いよ」と命ぜられますが、臣下としての分を守るため辞退します。以後会津藩が松平姓を名乗り、葵の御紋を使用する事になるのは三代藩主正容になってからで、これより会津藩松平家(保科家)は御親藩となります。

正之が残した家訓の第一条には、「将軍家には一心に忠義に励め」そして

「もし将軍家に逆意を抱くような藩主が現れたら、それはわが子孫ではないから従ってはならない」と定めています、以後藩主・藩士は共にこれを忠実に守り、幕末の藩主・松平容保は佐幕派の中心的存在として最後まで薩長軍と戦った。

同時代の水戸藩主徳川光圀、岡山藩主池田光正と並び江戸初期の三名君と賞され、藩政・幕政にかずかずの実績を残した会津藩主保科正之は領民にも慕われ「**高遠そば**」と共に、現代にも通じる偉業を残したのである。



変わりそば



へぎそば



茶そば

★上総飯野藩保科家が存在しなければ「更科そば」は無かった？

……かもしれない。

「更科」の発祥ははっきりしている。

寛政元年(1789年)、信濃布の行商をしていた八代目清右衛門が麻布永坂高稲荷下に「信州更科そば処 布屋太兵衛」の看板を掲げた。

これより以前、元禄始め(約300年前)太物商として布屋清助が、領主保科兵部少輔に招かれて江戸屋敷内(当時の麻布十番長屋)に住まうようになった。

のちに八代目清右衛門は領主保科家の麻布網代町江戸屋敷に出入りしているうちに、殿様から蕎麦打ちの腕前を評価されて、そば屋への転向を勧められたという。

その殿様は年代的にみて上総飯野藩保科家、七代藩主保科正率(まさのり)と推測される。

清右衛門はそば粉の集散地・信州更級郡の「更」と主家保科家から許された「科」の文字を合わせて「信州更科 蕎麦処」としたところ、客が「更科」と呼びならして通称となった。

初代が名乗った「布屋」は直系一族に受け継がれ、暖簾分けした店は

「布屋なにがし」の屋号をつけている。本家は1941年に一度廃業し、登録商標は手を離れてしまった。

1984年、堀井家八代目は元麻布に「総本家 更科堀井」を復活させた。

色が白くて舌触りの良い「さらしな蕎麦」は粉を御膳粉とも言われ、その上品な蕎麦は諸大名に喜ばれ御膳蕎麦とも呼ばれた。

江戸時代後期の文人、幕臣でもあった大田南畝(なんぼ)は永坂更科の蕎麦をその値段の高さから、「更科の蕎麦はよけれど高稲荷(高い也)

森(盛り)をながめて二度とコンコン(来ん、来ん)」と皮肉っている。

高稲荷とは別名三田稲荷とも呼ばれるお稲荷さんで、当時永坂更科の店の横の森にありました。

現在も永坂の更科工場屋上に鎮座しているとの事です。

◎保科兵部少輔とはどのような人物なのか？

元和3年(1617年)、信濃高遠藩主・保科正光は弟の正貞を養子としていましたが不仲となり廃嫡(一説には権力者の庶子を養子に迎えるため遠慮したとも言われる)します。

そして二代将軍徳川秀忠の落胤である幸松(のちの保科正之公)を養子として迎え、高遠藩保科家の継嗣とします。

一方廃嫡された保科正光の実弟であり、養子でもあった保科正貞は保科家を出て諸国を放浪した後に三千石の幕臣となります、そしてその後も加増され、さらに大阪定番となったことから一万石を加増されて一万七千石となり上総飯野藩(現在の千葉県富津市下飯野)を立藩します。

この上総飯野藩の三代藩主が保科兵部少輔(1665年～1715年)で延宝7年(1679年)従五位下兵部少輔に叙任・任官され、貞享3年(1686年)10月、父の隠居により家督を継いでいる。

布屋清助が保科兵部少輔の口利きで麻布の保科家江戸屋敷に住まうようになった約 300 年前と符合する。

保科兵部少輔は幼名、喜三郎・初名、正祥→正賢

◎8 代目清右衛門にそば屋を勧めた保科正率はいかなる人物か？

上総飯野藩七代藩主、明和 7 年(1770 年)家督継承、享和 2 年(1802 年)まで藩主。

八代目清右衛門が領主保科家の殿様の助言で麻布にそば屋を開業したとあるが、寛政元年(1789 年)の上総飯野藩保科家藩主は保科正率公であると推測されるが文献が不足のためそばとの関りについての詳細は不明である。

追記

上記の二題のレポートは十年前に江戸ソバリエ協会に提出した脳学レポートです、江戸ソバリエ教会理事の了解を得て投稿させて頂きました。



二ハそば



更科十割ヒスイそば



へぎそば・布海苔投入



練り終わり

上総飯野藩・歴代藩主

資料1

| | 名 | 生誕 | 死没 | 官位 |
|------|--------|--------------|--------------|-----------|
| 初代藩主 | 保科正貞 | 天正(1588年) | 寛文元年(1661年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まささだ) | 上総飯野藩初代藩主 | 慶安元年(1648年) | 17000石大名 |
| 二代藩主 | 政景 | 天和2年(1616年) | 元禄13年(1700年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさかげ) | 家督継承 | 寛文元年(1661年) | 越前守 |
| 三代藩主 | 正賢 | 寛文5年(1665年) | 正徳4年(1715年) | 従五位下・兵部少輔 |
| | (まさかた) | 家督継承 | 貞享3年(1686年) | |
| 四代藩主 | 正殷 | 元禄7年(1694年) | 元文3年(1738年) | 任官前死没 |
| | (まさたか) | 家督継承 | 正徳5年(1715年) | |
| 五代藩主 | 正寿 | 宝永元年(1704年) | 元文4年(1739年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさひさ) | 家督継承 | 享保3年(1718年) | |
| 六代藩主 | 正富 | 享保17年(1732年) | 寛政9年(1798年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさとみ) | 家督継承 | 元文4年(1739年) | |
| 七代藩主 | 正率 | 宝暦2年(1752年) | 文化12年(1815年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさのり) | 家督継承 | 明和7年(1770年) | 越前守 |
| 八代藩主 | 正憲 | 安永4年(1775年) | 天保15年(1844年) | 従五位下・能登守 |
| | (まさよし) | 家督継承 | 享和2年(1810年) | 下総守 |
| 九代藩主 | 正丕 | 享和元年(1801年) | 嘉永元年(1848年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさとも) | 家督継承 | 文化14年(1845年) | 能登守 |
| 十代藩主 | 正益 | 天保4年(1833年) | 明治21年(1888年) | 従五位下・弾正忠 |
| | (まさあり) | 家督継承 | 嘉永元年(1848年) | 子爵 |